

「新しいことにチャレンジしていききたい。自分も地元にも、必要な人になりたい」

今日9日、震災で被災した若者が、防災のあり方を提言するイベントが都内で行われた。スピーチに立った若手県釜石市の県立釜石高1年、浜登美海さん(15)は涙をこらえ、最後は力強く話を締めくくった。

両親と祖父母、姉、妹の7人家族。同県山田町でにぎやかに暮らしていた。あの日、中学1年の美海さんは高台の校庭に避難したが、自宅にいた母の干渉



自らの震災体験などを語る浜登美海さん(9日、東京都港区で)

15歳「自分も復興世代」

子さん(当時42歳)と祖父五夫さん(同82歳)、祖母ナヲさん(同79歳)、妹の心海ちゃん(同1歳8か月)が津波にのまれた。家族は父寿雄さん(45)、姉夏海さん(18)だけになった。

「泣きたい時は父や姉の気持ちを思い、布団の中で声を押し殺して泣いた。一生分の涙を流した」。このつらさは理解してもらえないと思い、他人には話せなかったが、昨夏、今回と同趣旨のプログラムに参加して考えが変わった。同じように家族を失った仲間が自らの経験を話しているのを知った。「自分も復興世代。地元に貢献しなくては」

美海さんは今、釜石市内の仮設住宅の子供に、遊びの機会を提供する活動の準備を進めている。15人ほどの若者などが加わり、6月開始を目指す。